

巻 頭 言

校長 景 山 三 平

国立大学の法人化がスタートし1年が経過しました。その中で、本校は広島大学の附属中・高等学校としての特色を活かし、全国的な中等教育の範となるべき教育機関として、基礎的・先端的教育活動を実践し、大学と連携した教育実践研究、及び学生の教育実習の場としての役割を果たし、かつ、これらを生かした社会貢献を実現することが、強く求められている。本研究紀要内容はその一端を示している。

我々は日々の教育実践や教育実習指導等の諸活動の中から、自身の問題意識の下でアカデミックな価値観に方向づけられた研究テーマを見出し考究し、その成果の一端を研究発表として表現している。どのような発表の場を利用するのかは、著者の価値観、論文の質など色々関係するが、いずれにしても、論文として自分の研究成果を世に問う姿勢は、高貴なもので、法人化した後も、全構成員に益々この姿勢が求められるものである。種々な場での活発な論文発表を期待したい。その発表形態の一つに本研究紀要が位置づいている。

本附属の研究紀要の歴史は、実に1932年7月に刊行した『中等教育の実際』(中等教育の大観)に始まり、幾多の変遷を経て、現在の研究紀要に至っている。これは附属中・高等学校が発行するもので、その執筆要項には、本校における教育実践・研究の成果を発表するものと位置づけられ、中等教育の発展に資する研究論文、実践記録であることと明記されている。本号には12編の単著論文が寄せられている。教科別に見ると、国語・書道3編、社会3編、数学3編、理科1編、工芸1編、家庭1編であった。本校の使命の一つである教育実習活動にスポットをあてた興味深い考察もある。ちなみに、過去6年間の掲載論文数は、53編で、その内訳を教科別にみると、国語・書道8編、社会8編、数学15編、保健体育4編、音楽4編、英語3編、家庭4編、情報2編、その他教科横断型のもの5編であった。年平均9編弱となる。今回の12編という論文数は、先生方による研究意欲の高まりの表れであると捉え、その努力に敬意を表したい。今回すべてが単著である。単独研究を決して否定するものではないが、昨今のように多忙な環境の中では、共同研究というスタイルを視野に入れて考究の質を上げ、仕上がりスピードアップを図る方法も考えても良いのではないかと考えている。この方法の良さに研究成果をフロアーに還元しやすいという点が上げられる。教育分野においては、研究のための研究ではほとんど意味はない。諸理論の教育実践化考察や教育実践を視野にいれた理論構築が求められている。このためにも共同研究という方法は有効と考えたい。

今回特に創立100周年を意識して1932年からの研究紀要目次の一覧を載せた。それらの研究題目を見るだけでも今日まで時代の変遷の中で中等教育に関しての問題意識及び研究動向を垣間見ることができ、本校が中等教育史に有意義な貢献をしてきたことを認識することができる。

このささやかな研究紀要が、教育関係者に対して多くの情報や大きな示唆を与え、意見交換を触発して教育研究と実践に寄与することを念願する次第である。